

リカード派社会主義経済学の賃労働

田中俊次*

(平成26年12月1日受付/平成26年12月5日受理)

要約: T. ホジスキンの資本理論の批判を通じて、「資本」とは何ぞやということが改めてより深く明らかになった。ホジスキンの場合には、資本は賃労働の搾取のために発明された名前に他ならないというところまでできていたのである。確かに彼の理論はなお「資本物神」とらわれており、ここからマルクスへの途は未だ必ずしも近くはないけれども、それでも我々はリカードよりもホジスキンの場合においてマルクスへの一歩が踏み出されていることを観ることができる。すなわち、「労働こそすべてである」という言葉は、リカードの見地から、リカード自身の前提の土台の上に立って、賃労働の利益を代表したリカード派社会主義者と呼ばれる人々がいうところのものだったのである。また、彼が利潤や地代の不当性を主張することによって、資本の本質をある程度は明らかにしたことは評価すべきである。

キーワード: 資本物神, 自然法, 労働力商品, 賃労働, リカード派社会主義

1. はじめに

近年、わが国の構造的経済不況は国民生活に深刻な影響を与えてきた。国民の大半が給与生活者であることを考えると、不安定雇用や低賃金、著しい賃金格差などの労働問題の解決は重要な課題である。さらに、労働者階級の全体的な姿を客観的に描き出し、そのおかれているあらゆる種類の貧困な状態と運命を克服する方途を示すことが求められている。

とりわけ、今日わが国の経済において大きな問題となっている雇用労働を取り囲む経済環境は、世界貿易システムの下での資本蓄積と連関した労働需給の問題や賃労働理論の再構築を必要としている。

そこで本論文では、雇用労働に係わる総体的な課題分析の理論的枠組みの基礎的検証の準備として、リカード派社会主義経済学の意義と経済学史上の位置について、D. リカード以後の経済学の動向と関連させて述べたい。特にT. ホジスキンの資本と労働に関する分析成果とその問題点について考察を行うことから、今日我々が学びえることは少なくないと考えられる。つまり、経済学の歴史に過去を学ぶのではなく、過去に学ぶのである。

したがって、本論文では、小生産者を中心とする「勤労諸階級」の立場から著された『労働擁護論』、『民衆の経済学』の考察をとおして、19世紀前半の賃労働の状態及び、その理論的問題の分析を行うことによって、賃労働の今日の課題の解決の糸口を見出したい。

2. リカード経済学の普及と学派の解体

J.M. ケインズは、「リカードオの追従者たち、すなわち、リカードオ経済学の理論を採用し完成した人たち」¹⁾とし

て、J.S. ミル、マーシャル、エッジワース、ピグーらをあげる。ケインズは彼以前の経済学者の需要・供給による価格決定論からの伝統的な市場分析を基礎とした理論を「古典派」とし、古典派の労働市場分析の批判をもって、『雇用・利子および貨幣の一般理論』をはじめた。彼は、リカード経済学の基礎はセイの法則にあるとし、「有効需要の大きな謎」²⁾に取り組むために、マルサスを復興しようとする。ケインズは、雇用の古典派理論として次の二つの「基本公準」(fundamental postulate)をあげている³⁾。①賃金は労働の限界生産物に等しい。②一定の労働量が雇用されている場合、賃金の効用はその雇用量の「限界不効用」に等しい。以上の①の公準は雇用に対する需要表を与え、②の公準はその供給表を与えるのであって、雇用量は限界生産物の効用が限界雇用の不効用と均衡する点において決定されるとする。また、「古典派理論」にあつては、「摩擦的失業」と「自発的失業」以外の「非自発的失業」は存在しないとしている。以上のように、ケインズにおいては、「古典派理論」の特徴は、セイの法則を前提とする「完全雇用の経済学」なのである。

しかし、はたしてケインズが述べるように、セイの法則がリカード及びそれ以後の経済学の基礎的前提であったのだろうか。ジェームズ・ミルが『商業擁護論』(Commerce Defended)で紹介し⁴⁾、「ミル氏の学説」(Mr. Mill's doctrine)ともいわれているこの法則は、リカードによっても受け継がれ⁵⁾、マカロックは大いに称賛した。

だが、ミークによれば、セイの法則がリカード体系の初期の公式化に果たした役割は、土地の収穫逓減の法則の確証にあつたにすぎない⁶⁾。ミークは、リカード体系は次の三つのものから成るとしている。①収穫逓減の法則②地代論③労働価値論説。マルサスとは異なって、リカードはこ

* 東京農業大学名誉教授

これらのことによって利潤率の低下を説明しているとする。

さて、リカードは、資本主義的生産の一つの典型として、農業における生産関係を捉え、「土地の所有者、その耕作に要する資本の所有者、および働いてそれを耕作する労働者」⁷⁾という資本主義社会の三階級に、労働生産物がどのように分配されるかをその課題とし、地代、利潤、賃金への分配を直接的生産過程に結びつけて、投下労働価値説に基づく価値分配論としての性格をもっているといえる。また、彼はその価値分配論を生産力の発展にも関連づけて論じている。

マルクスは「商品进行分析して二重の形態の労働に帰する事、つまり使用価値を現実の労働または合目的な生産活動に帰し、交換価値を労働時間または同質の社会的労働に帰すること」⁸⁾が古典派経済学の1世紀半以上にわたる諸研究の批判的な成果であり、イギリスではペティからリカード、フランスではボアギュベールからシスモンディまでであるとしている。さらに、マルクスは、リカードについて「階級利害の対立を、すなわち労働賃金と利潤、利益と地代との対立を、素朴に社会的法則と考えて、彼の研究の跳躍点にしている」⁹⁾とする。だが、それに続く1820～30年代は「リカードの理論の俗流化と普及の時期でもあり、またその古い学派との闘争の時期でもある」¹⁰⁾とし、1830年代を区切りとして「階級闘争は科学的なブルジョア経済学の弔鐘をうちならし」¹¹⁾、俗流経済学が登場してきたとしている。その当時のイギリスにおいて、機械制大工業の出現はマニュファクチュアを衰退させ、また農業においても第二次囲い込み運動が18世紀後半から19世紀半にかけて展開され、これらのことは小生産者層と小農民の無産化をもたらした。さらに、19世紀におけるそれまでの「過渡期の恐慌」¹²⁾に代わって、1825年から大規模な周期的恐慌がおそい始めるようになった。資本と労働との間の階級闘争は、次第に顕在化してきた。産業革命を経て、確立してきた資本主義はここに困難な問題に直面したのである。

エンゲルスは、「リカード学派は、1830年頃、剰余価値のために難破した。その解決しえなかったものは、その後継者である俗流経済学にとっては、全くもって解決しようのないものとして残った」¹³⁾とし、リカード学派を解体させたものとして次の2点をあげている。①「労働は価値の尺度である。しかるに、資本との交換においては、生きた労働は、それが交換される対象化された労働よりも、小さい価値をもつ。労働賃金、すなわち一定量の生きた労働の価値は、同量の生きた労働によって生産される生産物、あるいは同量の生きた労働がそれにおいて表示される生産物の価値よりも、つねに小さい」¹⁴⁾。②「リカードの価値法則によれば、二つの資本の充用する生きた労働が同量であり、また同額を支払われるばあいには、他のすべての事情が同じであれば、それらの資本は、同じ時間内には等しい価値の生産物を生産し、同様にまた等しい額の剰余価値又は利潤を生産する。しかしそれらの資本が、異なる量の生きた労働を充用するならば、それらは同額の剰余価値、またリカード学派の言うところでは利潤を、生産することはでき

ない。しかるに、実際にはその反対である」¹⁵⁾。

リカードは、「労働の自然価格」を労働者とその家族の生活資料の価値として考えていたが¹⁶⁾、その表層における矛盾と不合理性を理解しえなかった。この①の問題は、資本と労働との交換ではなく、資本と労働力が交換されるということによってマルクスが初めて解決した。②の問題、一般的利潤率の問題は、価値がいかに生産価格に転化するかということである。リカードは価格の背離を価値法則の例外として説明した。なぜ例外が起こるかということは、解決しえなかった¹⁷⁾。また、産業革命の進展につれて、資本の有機的構成の高度化する生産部門が増大するとともに、価値法則からの背離が、ますます目立つようになった。スミスは、資本主義経済の考察において、投下労働価値説を放棄し、支配労働価値説に進んだことによって、そのような矛盾におちいらなかったが、リカードは投下労働価値説の徹底によってそうすることはできなかった。マルクスはこの問題を価値法則の例外としてでなく、価値法則の発展として、価値の生産価格への転化を『資本論』第三巻において解明したのである。

リカードらの古典派経済学者は、労働による価値の規定を論じたけれども、労働力の商品化を基礎とする資本主義的商品経済における資本と労働との間の歴史的な特殊性を明確には論じていなかったといえる。マルクスとエンゲルスは、リカード価値説の科学的側面を批判的にうけつぎ、リカードがのりこえることのできなかった問題の本質的な解決を初めて示した。また、マルクス自身が述べているように¹⁸⁾、リカードの『経済学及び課税の原理』(以下、『原理』と略記する)が公刊されてからマルクスまでは、経済理論の上でほとんど目立った進歩はなかったといえよう。それゆえ、「リカードを通して重農学派からくりこされた伝統は、リカードの直接の後継者には受け継がれないで、マルクス(1818～1883)に受け継がれた」¹⁹⁾といえるのである。

3. リカード以後の経済学の展開

リカード以後、マルクスまでの経済学にはどのような展開があったのか。それは主として、三つの方向に分けて考えられる。①ジェームズ・ミル、マカロックらのいわゆる「リカード正統派」であり、彼らはリカード経済学を擁護したが、その中心をなす問題はリカードとマルサスとの間でなされた商品の価値と価格に関する論争であった。②リカード価値説の批判者であったマルサス、そして彼に続くトレンズ、ベイリーらである。彼らはリカード価値説の難点をめぐって、その批判を試みた。③ホジスキンの、ブレイ、グレイ、トムソンらの職工学校運動や協同組合運動の分野においても活動がめざましかった、いわゆるリカード派社会主義者たち。

ホジスキンの一群の思想家たちは、産業革命が進む中で、大体において、労働だけが富の源泉であるという観点から、富の分配面を観察し、勤労者の置かれている地位がむしろ悪化しつつあると主張し、当時の経済社会とその弁護論的性格をもった経済学に対する批判を行った。彼らがその批判において、基礎においた理論や思想はさまざま

あった。経済学では、それはスミスやリカードらであったし、思想的には、ベンサムやロックやゴドウィンらであった。しかも、彼らが理論とした社会もそれぞれ異なっていた。とはいえ、彼らがその当時の社会を改革して、新しい制度の社会を創ろうと考えたことにおいては一致していた。彼らは、のちにH.S. フォクスウェル(1849~1936)によって「リカード派社会主義」を提唱した人々とされている。フォクスウェルは、アントン・メンガーの『労働全収権史論』(Das Recht auf den vollen Arbeitsertrag in geschichtlicher Darstellung)の英語版の序文において「イギリス社会主義六大家」²⁰⁾として、ゴドウィン、ホール、トムソン、グレイ、ホジスキ、ブレイをあげている。「イギリス社会主義に対して、真実に有効なる思想上の刺戟を与えたものはオーエン派ではなくて、リカードであった。この思想上の刺戟は、間接、且つ消極的であったけれども、併し柄乎たるものである。タムスン及びその他の人々は、リカードの不幸な無理な演繹の論結の精確を承認して、そして疑問の余地なき権威として彼を引用している。リカードの結論の或者が、彼等の権利観念にとって戦慄すべきものであると考えたので、そして、リカードが社会の現存状態を以て彼の理論の前提となしたものと推断したので、彼等は自然、彼の論撃の全力をばリカードの理論の前提たる此の社会状態へと振り向けた」²¹⁾とフォクスウェルは述べている。

さらに、エスター・ローエンソールが『リカード派社会主義者』を1911年に公刊して以来、その用語が広まってきている。彼女は、リカード派社会主義者は、「1820~1840年代にかけて行った著述で、フランスの社会主義者すなわち観念的な社会主義者に続き、科学的社会主義の学派には先行していた」²²⁾とし、彼らの中で「最もきわだっていたのは、トムソン、グレイ、ホジスキ、ジョン・フランシス・ブレイ」²³⁾だと述べ、それらの4人をその著者において考察の対象としている。エンゲルスは、「20年代にリカードの価値及び剰余価値理論を、プロレタリアートのために資本主義的生産に対する攻撃に逆用し、ブルジョア自身を武器をもってブルジョアと戦」²⁴⁾った人々としてエドモンズ、トムソン、ホジスキ、レイビンストーンらをあげている。

ところで、ホジスキの場合についてみれば、彼は、直接的には、リカードというよりもジョン・ロックの財産権論から大きな影響を受けている。『自然的財産権と人為的財産権の比較』の「第二の手紙」、「第四の手紙」におけるホジスキの財産権についての基本的な見解は、ロックの『市民政府論』の「第五章・所有権について」における叙述をほぼ継承している。ホジスキは、「私は心から真に、財産権の起源と基礎に関する見解においてロック氏に同意する」²⁵⁾とし、「人間の勤労(human industry)によってつくられたものは何でも、当然に、つくられるにつれて占有され、つくった人に属する。実際、私はこの叙述とロック氏の叙述との間には何の相違もないと考えるつもりである」²⁶⁾。

そこで、財産権についてのロックの見解をホジスキと

の関連で若干考察して行きたい。ロックは、「世界を人間に共有のものとして与えたところの神は、同時にそれを生活の最大の利益と便宜とに資するように利用すべき理性を彼らに与えた」²⁷⁾とし、「人は誰でも自分自身の一身については所有権をもっている。これは彼以外の何人も、なんらの権利を有しないものである。彼の身体の労働、彼の手の働きは、まさしく彼のものであるといてよい。そこで彼が自然が備えそこにそれを残しておいたその状態から取り出すものはなんでも、彼が自分の労働を混えたのであり、そうして彼自身のものである何物かをそれに附加したのであって、このようにしてそれは彼の所有となるのである。それは彼によって自然がそれを置いた共有の状態から取り出されたから、彼のこの労働によって、他の人々の共有の権利を排斥するなにものがそれに附加されたのである」²⁸⁾と述べる。「泉に流れ出る水は、万人のものであるが、しかし水瓶の中のもの、それを汲み出したもののみ属するというを誰が疑おうか。彼の労働が、自然の手、そこではそれは共有であり、かつその子らのすべてに平等に属していたから、それを取り出し、これによってそれを自分の専有物としたのである」²⁹⁾。

これらの所説からわかるように、ロックは私有財産制度に反対しているのではない。むしろ、彼は私有財産制度こそが生産を高めるために必要だと考えている。彼は、財産権の主要な対象は今や土地そのものにあるとし、彼の時代において大きな問題となっていた共同地の囲い込みについて次のように述べている。「土地の所有権も同じようにして獲得されたことは明白だと思う。ひとが耕し、植え、改良し、開墾し、そうしてその産物を使用し得るだけの土地は、その範囲だけのものは、彼の所有である。彼は自分の労働によって、それを、いわば共有のものより自分自身に囲い込むのである」³⁰⁾。「囲い込みをされ開墾された1エーカーの土地から産出する、人間の生活の維持に役立つ食料は、同じ程度に肥沃な1エーカーの土地が共有として荒地になっている場合に産出するものの(きわめて控え目について)10倍であろう。それ故、土地を囲い込み、そうして、10エーカーの土地から、自然のままの100エーカーから得られたであろうよりも遥かに多くの生活の利便を得ているものは、まさに人類に90エーカーを与えたものといいたいだろう」³¹⁾。

ホジスキは以上のようなロックの所説を祖述し、またそれらをふまえて彼の見解を述べている。とはいっても、ここで注意すべきことは、ホジスキはまさにリカード派解体期、すなわち小生産者の没落と労働運動の高揚を見た19世紀前半を背景として、その時代を特徴づけるような形で登場してきたということである³²⁾。

ロックは、労働の生産物は労働を加えた者に属すべきだという労働全収権を説くのであるが、彼は基本的には封建的土地所有の解体期に生まれた独立自営農的な社会観から出発しているといえる。また、ロックは「すべてのものに、価値の差等を与えるのは実に労働に他ならない」³³⁾とし、「パンが樅の実より価値があり、葡萄酒が水より価値があり、織物や絹が木の葉、皮、苔より価値があるのは、一に

全く労働と勤労に基づくものである³⁴⁾と述べ、投下労働に基づいた価値説を示している。しかし、厳密にはそれだけでは投下労働価値説とはいえない。というのは、投下労働が価値を生み出すということと、商品間の交換比率が投下された労働量によって規制されるということは、論理的に次元が異なるからである。ロックの同時代人であるウィリアム・ペティ(1623~87)は、地代としての剰余生産物の価値は投下労働を媒介として貨幣(金銀)に換算できると考えるまでに至ったが³⁵⁾、ロックの場合は投下労働はほとんど財産権の基礎と考えられているのであって、働く者の権利を代表するような思想となっている。ホジスキンの関係もこの意味において重要性をもっているといえる。また、ロックの用いる「価値」という用語は、使用価値と区別されて把握されているのではなく、「労働」は具体的有用労働を意味しているのである³⁶⁾。

マックス・ベアは、「1760年から1850年にいたる時代の、社会的または政治的批評を支配した主要な思想的潮流³⁷⁾」について次のように述べている。「(一) 共有財産は自然的である。したがって公正であり、正当である。(二) 労働は財産すなわち富に対する唯一の権限である。(三) 自然——人間も含めて——は、固有の、神聖なる、合理的な法則によって支配される。／ここからまたつぎの結論がうまれる。／(一) 私有財産は不自然的であり、有害であり、廃止されるべきである。(二) 地代、利潤、利子という形で、労働の生産物からの控除はすべて、自然法に対する違反である。(三) すべての改革は、自然法の復活を目指すか、あるいはそれに合致することを目的としなければならない³⁸⁾。これらの思想を述べた「共産主義や社会主義者や反資本批評家³⁹⁾」がチャーチストの教師となり、大衆にこれらの思想の普及をしたとする。

しかるに、ロックにおける自然法思想は、私有財産制度を前提とするものであるが、ホジスキンはまた次のように述べている。「自分自身の勤労の生産物を自分自身の利己的な使用と享楽のために、所有し私有することを(to have and to own)、個々人の権利による一財産権と見なすと宣言することによって、私を完全に彼ら[オーエンやサン・シモンら]から切り離すことを許してほしい⁴⁰⁾。このように、ホジスキンはロックの近代自然法に戻っている。ホジスキンはロックに基づき、労働投下による財産権を神聖視するが、「ベンサムとミルと彼らの尊大な後継者は、不毛で労に報いない土地に、自然の信義の種子を投じてはいない⁴¹⁾」とし、ベンサムを次のように批判する。「最近、ベンサム氏の全哲学の基礎である最大幸福原理について、多くのことが非常に不必要に述べられてきている。神(Deity)が最大幸福を望んでいることは、何ら疑いえない。立法者が国の利益について語る時はいつでも、最大多数の住民の最大幸福を意味するようによそおうということも疑いえない。また、個々人の能力は、自分自身の保護を保証することには見事に適応しているが、国民の幸福をはかるのには適当でないということも疑いえない。それゆえ、立法者が一般的な利益を考えることは認めるけれども、いかなる個人も一般的な利益を促進するものをつきとめることが不可

能であるということは、どんな立法もあるべきでないという結論に直接に導く。もし、最大幸福原理が立法を正当化する唯一のものであるならば、そしてもしその原理がそれをはかる何の手段ももっていない人である博識者についてのみふさわしいならば、ベンサム氏が民法と刑法とよんでいるその見事に脚色された計略の正当化もありえない⁴²⁾。ロックの時代において、自然法思想は法思想、政治思想における支配的な地位を占めていた。それは人間の本来のあるべき状態が示しているが、実際に存在した状態というのではなく、観念的な理想状態の一つである。自然権、すなわち人間は生まれながらにして所有している生命、財産、安全幸福追求などの諸権利を行使することができるというもので、またこの自然権の実現のためには、互いの自由意志に基づく契約によって政府をつくる必要があるとする。これが社会契約である。

このような自然法、自然権、社会契約の思想は、絶対主義王政に反対する近代市民社会形態の運動として行なわれた。イギリスにおいては、ミルトン、トマス・ホブズらが17世紀のピューリタン革命とクロムウェルの共和政を自然法の立場から支持した。ロックはホブズと同様に、自然権を主張し、社会契約の成立を考えるが、ホブズとロックとでは生産力の認識に相違があり⁴³⁾、したがって先に見たように、ロックは自然状態のなかにも私有財産権の成立を認めるのである。ロックはホブズとは異なって、財産権を保護するためにこそ、国家が必要であると考え、自然権という合理性に基づく社会の分析へと進んだ⁴⁴⁾。

4. T. ホジスキンの自然法思想と労働全収権

さて、19世紀前半のイギリスにおいては、思想的には、ベンサムの功利主義が支配的であった。ロックは自然法思想は、神学的な道徳的性格をもつものであるが、ヒュームにおいてはそのような道徳的性格はほとんど捨て去られ、ロックが述べたような空想上の社会契約は、もはやブルジョアジーにとって必要ではなくなっていた。資本主義社会の初期においては、ブルジョアジーは自然権と社会契約を前面に出して、封建的権力と闘ってきた。だが、19世紀においては、自然権や社会契約はもとより、スミスのいう「見えざる手」による自然的調和ものりこえられつつあって⁴⁵⁾、ブルジョアジーの経済的自由の要求は、「幸福の計算」を可能とする功利主義によって正当化されるに至る。ブルジョアジーは自らの実力によって、法律の規定と政治への参加を要求するところまで発言力を強めたのである。

しかるに、ホジスキンは、ブルジョアジーにとっては功利主義に発展的に解消した自然法思想をもち出し、それを勤労者の立場から復活しようとした⁴⁶⁾。

ホジスキンの生きた時代である産業革命期には、小生産者層の没落とプロレタリアートの増大という事実があった。ホジスキンはこれらの事実、労働全収権が失なわれつつある過程を自然と人為の対立として捉えた。先に見たように、彼は人類が自然の法則にしたがうならば、生産力はほとんど無限に発展し、生産力を停滞させるのは人為によるとする。彼は当時支配的であった収獲逡減の法則にかえ

て、収穫は増えると主張した。これらのことによって、労働者階級の貧困を自然の法則だとするマルサスとその支持者であるブレースらを批判したのである。

ホジスキンは土地に関する財産権について次のように述べている。彼によれば、人類が狩猟か牧畜、さらに耕作へと移るにつれて、必要とされる土地の広さも変化する。「未開で野蛮な猟師から、人々は牧人になって、以前に飼っていた獣群にえさを与える。しかし、この状態においてさえ、猟師が必要とした広さと同じではなかったけれども、人々は家畜と自らを養うために広大な地域を必要とした」⁴⁷⁾。「つづいて、人々は農夫になった。その場合、各自に生活資料を供給するには比較的小さな土地で十分であった。彼らは住居を固定し、そのまわりに境界をおいた。各自は原始農業の未熟さにしたが、耕し、種まきし、生育させることができるだけの土地、また彼がその家族に食物を供給するのに必要とみなした土地を占有する」⁴⁸⁾。このように、ホジスキンは社会が発展するにつれて、人々は次第に狭い土地で十分生活することができるようになるとしている。

しかし、実際には、封建社会においては、大土地所有が一般的であって、農奴が存在していた。それをホジスキンは、ノルマン族のヨーロッパ征服と彼らの大土地所有の慣習によって、自然的財産権が侵害され、人為的財産権が確立したからだとする。さらに、征服者とその子孫は法律によって人為的財産権をまもろうとしたとする⁴⁹⁾。

次にホジスキンは法律的(人為的)財産権は自然的財産権によって克服されたことを述べる。それは封建制の衰退と農奴の開放によって示された変化である。「ノルマン諸侯によって占有された地域でそのまま彼らの現在の子孫にうけつがれたものはない。それらはすべて細分割されて、それらの部分は一般に銀行家、衣服商、株式仲買人、商人、金貸し業者及びその子孫にうけつがれた」⁵⁰⁾。「ヨーロッパの大部分を通じて、土地は縮小する部分に分割されたばかりでなく、それは軍人諸侯の子孫から手離されて、かつて大いに軽蔑された彼らの下僕と奴隷の子孫の所有となる」⁵¹⁾。

さらに、ホジスキンはスミスの『諸国民の富』を参照して、次のように述べる。「わが国の過去の最も鋭敏な研究者の一人であるアダム・スミスは、ヨーロッパを通じての農奴解放、都市の成長、商業と工業の利権の上昇、有力な中級階級の形成及び土地貴族の相対的な衰退を十分に証明し、法律的財産権を変え、すべての階級の政治的関係を変えることが、法律をもつともせずにもたらされたということ十分に証明した」⁵²⁾。ホジスキンによれば、人口が増加するにつれて、新しい必需品が生産され、新しいぜいたく品が人々を満足させた。また新しい階級が生まれ、新しい形態の富がつくり出された。以前には、財産の形態は土地に限られていたように思われるが、現在ではそれがかなり拡大してきているとする⁵³⁾。「次第につくり出される新しい富に対する権利は、今や一般的に、領地に対する地主の権利と同じほど神聖だとされている。ヨーロッパの社会における中間階級の成長は、この新しい富に対する財産権の漸次的承認に基づいている」⁵⁴⁾。「ヨーロッパの都市の住

民、中間階級が成長して勢力と権力を得て、ヨーロッパの立法者であった地主をもつともせず、個人と国家に関するすべての政治的関係を変えたということほど確かである事実はない」⁵⁵⁾。以上のように、ホジスキンは、封建制の衰退を人為的財産権に対する自然的財産権の勝利の過程として把握している。

しかし、今や資本家は土地貴族が持っていた権力を獲得しているとホジスキンは述べる。「元来、労働者であった、すなわち農奴の子孫であった」⁵⁶⁾資本家は、自分自身の生産物や利潤から貯蓄することができたとする。さらに、ホジスキンは、資本家が利潤を得る権利は、土地貴族が農奴の生産物の一部分を受けとる権利と同じだとする⁵⁷⁾。このようなことから、「労働者がいかに多量の労働を投下し、彼らの労働がいかに多くの人々を養うかを知るならば、彼らの貧困と困窮の直接的かつ近似の要因は、彼らの生産物を歳入、地代、10分の1税、利潤の形で横領する法律にあることは疑いえない」⁵⁸⁾、今や「彼ら〔資本家〕の支配を維持することが人定法の趣旨である」⁵⁹⁾と主張する。

ホジスキンは、「現在の社会状態」における人為的な制度の下で、資本家や地主は権力や欺瞞によって、利潤や地代を取得しているとし、資本主義的搾取を人定法に基づく自然法の侵害として捉える。すなわち、労働全収権の侵害として捉えるのである。彼は社会の矛盾をつねに、自然と人為との対立として捉えたが⁶⁰⁾、社会が一つの形態から別の形態に変わる根本的な起動力を生産力と生産関係の矛盾として捉えることはできなかった。したがって、彼は、生産力の発展そのものが独立小生産者層の没落をおし進めるといことはほとんど考えない。

『労働擁護論』では、彼は「共存的労働」(社会的分業)に、基づく生産において、各人はいかにして労働全収権を実現するかという問題を見出す。各人の自由な判断にまかせべきだとして、スミスのいう「市場のかけひき」にゆだねた⁶¹⁾。この点において、ホジスキンと同様にリカード派社会主義者といわれているとはいえ、トムソンの主張は異なっている⁶²⁾。

「市場のかけひき」は自由競争原理に基づくものであり、それは資本蓄積を促進し、結果的に労働全収権を侵害せざるをえない。ホジスキンは『民衆の経済学』と『自然的財産権と人為的財産権の比較』においては、中間階級の社会に期待している。彼は次のように述べている。「今や、現代の顕著な状況の一つは、また少なくとも注目された道徳的結果の一つは、中間階級の驚くべき相当な増加である。この機会と結びついてわずかの労働をする人々は、労働者であるとともに資本家でもある」⁶³⁾。「その階級はこの50年間に驚異的に増加してきているし、その階級は新しい仕事と新しい機械をもって一層広範囲にわたって増加するにちがいない。またその階級は、単なる奴隷的労働者と土地の地代や貨幣の利子で生活している単なる怠惰で物ぐさな愚者の両方を根絶するにちがいない」⁶⁴⁾と主張する。

5. A. スミスと T. ホジスキンの支配労働価値説

スタークスはホジスキンの歴史観について次のように述

べている。「立法者の野望と貧欲はりょうがされた。それは自然法の慈悲ぶかい作用によってりょうがされた。この言葉は後にカール・マルクスによって古典的に展開された唯物史観の基本観念を含んでいるようにおもわれる。なぜなら、ホジスキンのいおうとしているのはこうだからである。すなわち、社会の社会的・経済的下部構造は変化した。したがってまた、法律的上部構造は、結局、必然的にそれに照応する変形をこうむらなければならなかった」⁶⁵⁾と。また、アレヴィも「マルクス以前に、ホジスキンは経済世界についてこの概念に基づき、歴史の経済的または唯物論的概念を確立した」⁶⁶⁾、「マルクス主義の歴史哲学の起源は、ホジスキンの基本的な先入観の一つである経済的無政府主義にある」⁶⁷⁾と述べている。たしかに、ホジスキンの所説には、弁証法的な歴史観に通じるものがある。しかし、彼の見解は、基本的には観念的なものであったといえる。彼は、一応は諸階級の地位を生産力の歴史的発展段階と関連させて考察しているようであるが、前資本主義的搾取と資本主義的搾取との間の形態的な相違を明らかにしているわけではない。したがって、ホジスキンは資本主義社会（彼の言う人為的制度による社会）の批判を徹底させて、生産手段の私的所有を否定する科学的社会主義へと進むことはできなかった。それどころか、社会主義はむしろ専制の一種であると見なしているのである⁶⁸⁾。それゆえ、ホジスキンは、反封建制、反ブルジョアジー⁶⁹⁾、であるととも反社会主義の立場にもあったといえよう。

ホジスキンはその著書においてスミスから多くの引用をしているが、次のようにも述べている。「科学のこの部門〔経済学〕に関して、スミス博士の後継者の著述はまず第一に不完全である。彼らは分配の問題に関して主として誤っている。かの偉人は注意深く自然的な富の分配と人為的財産権とを区別した。これに反して、彼の後継者は何らそのような区別をしていない」⁷⁰⁾。「明らかに、スミスが地代と利潤とによってもたらされると示した価格の増加は、労働の増加を意味するのである」⁷¹⁾。スミスは、労働は交換価値の実質的尺度であり、いっさいの物に支払われた「本源的な購買貨幣」であったとし、労働価値説を説く。彼は「あらゆる物の実質価格 (real price)、つまりあらゆる物がそれを獲得しようとする人に現実についやされるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である」⁷²⁾とし、また分業が活発になる「商業社会」(commercial society) においては商品の価値は「それを所有してはいても自分自身で使用または消費しようと思わず、それを他の諸商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品がその人に購買または支配させる労働の量に等しい」⁷³⁾とし、前者においては投下労働価値説、後者においては支配労働価値説を述べる。スミスにおいては、二つの価値説が混在している。しかし、支配労働価値論は「商業社会」における商品交換を抽象し、投下労働価値説は自然と個人間の物の関係を抽象したように考えられる。したがって、スミス自身にとっては、価値の二面的把握はさほど矛盾するものではない。とはいえ、スミスは投下労働量と労働賃金を混同して、「商業社会」においては、本来の賃金部分から利潤

と地代が控除されると考えていた。労働生産物の価値と賃金を混同、いいかえれば労働全収権と労働価値論との混同ともいえるのである。

スミスの見解は、ホジスキんに影響を及ぼしている。先に見たように、ホジスキンは価格を論じる場合に、「自然価格」(彼は「必要価格」という用語も用いている)と「社会価格」とに分けている。彼は、「現在の社会状態」では、ほとんどすべての商品の価格は社会価格であって、社会価格と自然価格の差額が資本家や地主の利潤や地代だと考えた。このような考え方は、スミスの支配労働価値説と密接に関連している⁷⁴⁾。

ところで、スミスは投下労働を「労苦や煩勞」とみなし、「労働こそは、最初の価格」⁷⁵⁾として捉えていた。そのことは、彼が「労働」が商品として売られる関係を初めから前提していることになる。また、スミスは「資財を蓄積している人々」が「勤勉な人々」を就業させて利潤をうけとり、労働者は「労働の価値」(支配労働)としての賃金を受け取るという関係として⁷⁶⁾、すなわち資本家と労働者の関係を単なる商品交換の関係として考えているにすぎない⁷⁷⁾。資本主義社会は労働力の商品化に基づいて、生産過程を価値増殖過程として行うのであるが、資本家と労働者の関係を単なる商品交換の関係としてスミスが考えたことは、そこにおいてもはや歴史的に特定の段階である資本主義社会を分析する視角が欠けていたといえる。したがって、彼は現実の資本主義社会を分析する場合、支配労働価値説におちいらざるをえない⁷⁸⁾。

ホジスキンは、賃金、利潤、地代を「いっさいの交換価値の三つの本源的な源泉」⁷⁹⁾とするスミスの構成価値説の考えに基づき、「現在の社会状態」では、労働者は商品を買う場合、自然からそれを買うよりもずっと多くの労働を与えなければならないと考える。しかし、価値の二面的把握にもかかわらず客観的な価値説をさぐっていたスミスとは異なって、ホジスキンの解決は簡単であった。ホジスキンは権力や欺瞞といった経済外的な要因によって、資本と労働との交換を自然法に反する不等価交換として捉えたのである。

一般に、リカード派社会主義者はリカードの労働価値説に基づき、労働全収権の主張へと進んだとされている。また、マルクスは次のように述べている。「第三のパンフレット『労働擁護論』は、リカードの説明の必然的な帰結として、資本は不生産的である、という命題を高らかに掲げる。これはトレンズやマルサスなどへの反対論であって、彼らにあっては、労働は価値の創造者である、というリカードの命題が、リカードの説明の一方の側面に依拠しつつ裏返しになって、資本は価値の創造者である、という逆の命題に一変するのである。同時に、スミスからマルサスに至るまで一貫しており特に後者にあっては絶対的な定説にまで持ち上げられている命題(ジェームズ・ミルにあっては同様)にたいする反論、すなわち、労働の生活条件としての現存の資本量への労働の依存という命題に対する反論でもある」⁸⁰⁾。

リカードは、価値に関してスミスと同様に、「使用価値」

と「交換価値」とに分けるが、使用価値（効用）は交換価値にとって不可欠なものであっても、価値尺度にはなりえないとして、交換価値の研究に重点を置く。彼は、稀少財の場合を除けば、労働がすべてのものの交換価値の基礎であるということは、「経済学上最も重要な教義である」とする⁸¹⁾。スミスにおいては、投下労働価値説と支配労働価値説が混在していたけれども、リカードは、「一財の価値、即ちそれと交換になる他財の数量は、その生産に必要な労働の相対量に依って定まるものであり、この労働に対して支払われる報酬の多少によるものではない⁸²⁾とし、投下労働価値説を受け継いでいる。さらに、彼は、『原理』第1章第3節以下では、資本蓄積を前提としても、投下労働価値説が貫徹するとしている。リカードは、このような指摘によって、スミス価値説における混乱を一応は純化したといえる。だが、スミスは資本と労働との交換、より少ない対象化された労働とより多い生きた労働とが交換されて剰余価値が生み出されるということを感じていたが、リカードはスミスを混乱させた資本主義社会に特有な資本と労働の交換を問題にさえない。リカードの限界はこの点にあった。また、彼は商品の価値とその価格の相違を解決しえなかったことから、彼の価値説の修正をせざるをえなかった⁸³⁾。そこで、実際の価格変動と価値との関連が『原理』第3版において大きな問題になったのである。

リカード労働価値説修正は、本質的な解決を与えたのではなかったけれども、この問題に関して、リカードの労働価値説の擁護に向かった者がホジスキンの『労働擁護論』で批判の対象としたジェームズ・ミルとマカロックであった⁸⁴⁾。ミルは『経済学綱要』(Element of Political Economy)において、四分法（生産、分配、交換、消費）を採用し、形式的には、リカード理論を体系化したといえるが⁸⁵⁾、ブドー酒論争における彼の解決は次のようなものである。彼はこの問題を、資本の回転数と平均利潤の法則をもって説明するのではなく、ブドー酒生産と貯蓄に投じられた資本が、労働が行われたあとも価値を増加させるというように述べている⁸⁶⁾。したがって、価値と価格に関する彼の解決は、「リカード学派の解体も彼とともに始まる⁸⁷⁾」ということになる。他方、マカロックは人間労働と自然力とを同一視し、ブドー酒論争においては醸造作用というような自然作用も労働に含めることによって投下労働価値説を維持しようとする⁸⁸⁾。また、彼はリカードが『原理』第3版「第31章・機械について」において従来の通説である「補償説」にかえて「排除説」を論じたこととは異なって、ジェームズ・ミルと同様に補償説を支持し、資本主義的生産の弁護へと向かったのである。

詭弁的な論理を展開したミルとマカロックは「リカード学派の解体」をおし進めたといえるが、ここで注意すべきことは、リカード価値説の中に、先に見たような矛盾があったということからもくるのであって、その矛盾を本質的に解決しえなかった彼らが、そのような方向に進んだのは、当時の経済学の潮流に合わせて考えてみれば⁸⁹⁾、むしろ当然であったともいえる。

しかるに、ホジスキンは「労働がすべての富を生み出し、

それは価値の唯一の尺度である⁹⁰⁾とする。彼のこの見解はリカードに通じるものであるようだが、リカードとは異なって、ホジスキンは労働者は商品を購入する場合には、その「自然価格」（価値）以上の価格で購入しなければならないと考えている⁹¹⁾。ホジスキンは、資本主義社会における商品売買はその価値通りには行なわれず、また資本と労働との交換は自然法に反して行われるとする。彼は俗流化した経済学と対決することを宣言し⁹²⁾、その批判を行なったけれども、価値法則に基づいて、利潤の源泉である剰余価値を解明することはできなかったのである。

6. D. リカードと T. ホジスキンの価値説

ホジスキンはリカード価値説を前提とし、リカード理論は、「資本家の搾取が労働者の貧困をもたらすということを確認している⁹³⁾とする。しかし、リカードは投下労働価値説を述べても、そのことから労働全収権の主張へと進んだのではない。しかるに、ホジスキンは相等しい労働の交換の実現のための社会的な規範として、彼の自然法思想と結びつけて⁹⁴⁾、労働価値説を把握していた。したがって、彼が経済分析の概念としてそれを理解していたとはいえない。そのことは、先に見た彼の生産的労働に関する見解においても同様であって、彼は勤労階級の主体的な要求から出発しているといえよう。

それは以下のことからいえる。スミス、リカードらは「労働」を商品として把握し、賃金の本質を「労働の価値または価格」として考える。ホジスキンは、「もし私が富の創造者である労働を商品という用語に含めるとすれば、確かにその推論は誤っているだろう……⁹⁵⁾と述べている。このことは正しい方向の一端を示しているように考えられる。しかし、彼は商品としての「労働」を否定することに留まり、商品としての「労働力」を見出したわけではなかった。彼にとって、「私の目的は、財産の分配さえも自然法によって規制されることを示すこと⁹⁶⁾であった。

以上の問題は重要な意味をもっている。エンゲルスは次のように指摘している。「労働者は唯一の真の生産者であるのだから、彼らの生産物たる全社会的生産物は彼らのものである、という上述したリカード理論の応用は直接に共産主義につながるものである。しかしこのやり方は、マルクスが上述の箇所でも暗示しているように、経済学上からいえば形式的に正しくない。というのは、それは道徳を経済学に適用するものであるから。ブルジョワ経済の法則からすれば、生産物の大部分はそれを生産した労働者のものではない。そこで、それは不正だ、そうあってはならないのだ、などわれわれがいったところで、それは差しあたって経済には何のかかわりもないことである⁹⁷⁾。「マルクスは、彼の共産主義的要求を道義感の上に打ち樹てたのでは決してなくて、必然的な、われわれの眼前で日増しにつのってゆく資本生産様式の崩壊の上にこれを基礎付けたのである。彼はただ、剰余価値は不払労働から成っており、このことは単純な一つの事実だといっているだけである。とはいえ、経済学上、形式的に誤りであることも、世界史の観点に立てば却ってそれ故に正しいことでありうる。大衆の

道義意識が曾つての奴隷制もしくは賦役労働といった経済的事実を不正であるとみなすなら、それはこの事実そのものがつとに時代遅れとなってしまい、別の経済的事実が入り込んできて、ためにかの経済的事実が耐え難いもの、また支持しえぬものになってしまったということを証明している⁹⁸⁾。

また、ホジスキンは、「資本」を明確に生産関係として把握しえず、結局、彼が批判の対象とした「経済学者」と同様に、資本の素材的要素である物と見なした。しかし、彼が利潤や地代の不当性を主張することによって、資本の本質をある程度は明らかにしたことは評価すべきである。彼は次のように述べている。

「固定資本はその効用を先行の労働からだけではなく、現在の労働から引き出すのである。そしてその所有者に対して利潤をもたらすのは、それが貯えられていたからではなくて、それが労働に対する支配力を獲得する一手段であるからである⁹⁹⁾。彼は、ジェームズ・ミルとマカロックの価値論、利潤論を批判するためにこのような見解を述べたのであり、マルクスが指摘しているように、それは資本の本質を明らかにし、利潤の源泉である剰余価値を説明するのに積極的な意義をもっていたといえる¹⁰⁰⁾。とはいっても、ホジスキンは、歴史的に特定の段階である資本主義社会において、資本がどのようにして労働を支配するのか、また利潤がどのようにしてもたらされるかを科学的に解明したのではなかったのである。

7. おわりに

以上、リカード派社会主義、特に T. ホジスキンの経済学は、小生産者を中心とする「勤労諸階級」の立場にあった。彼は「労働者と資本家の両方の性格をもつ¹⁰¹⁾」中間階級が増加してきたことを喜び、その将来に期待している。しかし、ホジスキンは、マルクスが述べている「一方の側の労働者と他方の側の資本家および地主との中間にあって、つねに増大する規模で大部分収入によって直接に扶養されている中間的諸階級¹⁰²⁾」が実際にどのような状態にあるのかをほとんど考えない。

また、ホジスキンは人為的な制度を廃し、自由な労働を実現するために労働者の団結を擁護したのであって、それ以上ではなかった。それ以後の著書において、彼は自然的な社会を主張したのであり、したがって、マルクスの先駆者というよりロックの後継者といったほうがよいかもしれない。しかも、ホジスキンの場合、「ロックにくらべて規範性がつよめられて¹⁰³⁾」いる。とはいえ、ホジスキンの労働運動にかかわった 1820～30 年代にかけては、労働運動の中心をなしていたのは、熟練職人層や小生産者層であって、彼の自然権に基づく主張が高まりつつあった労働運動を勇気づけたことは確かである。

しかし、ドップが述べているように、利潤が「近代社会における労働者の『自由』とどうして両立¹⁰⁴⁾」するかということは、資本家が「瞞着が強制力かによって、あるものをその価値以下に買い、他のあるものをその価値以上に売る¹⁰⁵⁾」という説明でできるものではなく、またそのような

説明には、「もし労働者または消費者のこのような搾取がおこなわれるなら、それは競争の不完全な作用によるだけであり（さもなくば市場の圧力は物をその価値で交換するようにさせるだろう）、この種の事態の救済策は、いっそう完全な競争、それこそまさにブルジョア的自由交易論者が鼓吹しつつあったもの¹⁰⁶⁾」をまねく。ホジスキンは、初めから、彼が不等価交換と捉えたものを自由競争で克服しようとしたのであって、後年、彼は自由貿易運動へと走ったのである。とはいえ、ホジスキンは構成価値説の考え方に基づいて、資本と労働力との交換を自然法に反する不等価交換として捉え、労働こそが価値生産のすべてであるという認識に立ったのである。資本に対自的な賃労働のこの概念により、マルクスとリカード理論が結節されることとなったのである。

注および引用文献

- 1) J.M. ケインズ『雇用・利子および貨幣の一般理論』塩野谷九十九訳、東洋経済新報社、1983年、3～4頁。
- 2) 『同上書』、37頁。
- 3) 『同上書』、5～8頁参照。
- 4) Cf. J. MILL, Commerce Defended, 1808, pp.81～84
- 5) D. リカード『経済学及び課税の原理』、竹内謙二訳、東京大学出版会、8～9頁、396～399頁参照。
- 6) R.L. ミーク「イギリスにおけるリカードの経済学の衰退」吉田洋一訳（『イギリス古典経済学』未来社）1956年、15～22頁参照。また、中村広治氏は、リカードとマルサス間の往復書簡などから、「わたくしはリカードの蓄積論体系を、蓄積元本たるべき利潤の確定と蓄積動機たる一般の利潤率規定という不可欠の両面をもつものとしてとらえているので、この観点からするかぎり、セエ法則は、リカード体系をささえる柱ではなく、その論理必然的帰結＝分枝として蓄積論のうちにビルト・インされていると解する」（『リカード体系におけるセエ法則』大分大学『経済論集』第27巻第1号、1975年、49頁）と述べている。
- 7) D. リカード『前掲書』、7頁。
- 8) K. マルクス『経済学批判』武田隆夫・遠藤湘吉・大内 力・加藤俊彦訳、岩波文庫、1970年、57頁。
マルクスは投下労働価値説が「ブルジョア的生産関係の内的関連を研究」（『資本論』(一)、向坂逸郎訳、岩波文庫、1967年、146頁）しうるものとして考え、それをもって古典派経済学を規定するので、マルサス、J.ミル、マカロックらは古典派とみなされない。
- 9) 10) K. マルクス『『資本論』第二版の後書』向坂逸郎訳（『資本論』(一)、岩波文庫、22頁。
- 11) 「同上稿」、23頁。
- 12) F. エルスナー『経済恐慌』恐慌論研究会訳、大月書店、244頁。
- 13) 14) F. エンゲルス『『資本論』第二巻序文』（『資本論』(四)、岩波文庫）34頁。
- 15) 「同上稿」、34～35頁。
- 16) D. リカード『前掲書』、83頁参照。
- 17) 「資本の耐久力の程度がちがうために、或は同じ事ではあるが一種の財貨が市場に持出される迄に経過せねばならぬ時間のために、これらの財貨の価値は正確に、それに投ぜられた労働量に比例してはおらぬであろう、それは一に對する二というが如きものではなくて、価値の多い方のものが市場に持ち出される迄に経過せねばならぬ時間の多いのを償うために、若干これ以上であるであろう」（D. リカード『同上書』、34頁）。
- 18) マルクスは、1851年4月2日のエンゲルスあての書簡で次

- のように述べている。「要するに、この科学は A. スミスと D. リカード以後は少しも進歩していないのだ。たとえ個々の研究では、しかも往々にして非常に細かい研究では、たぐさんのことがなされているにしてもだ」。(K. マルクス・F. エンゲルス『資本論書簡』(1), 岡崎次郎訳, 国民文庫, 1971年, 93頁)。
- 19) M. DOBB, *An Introduction to Economics*, p.59.
- 20) H.S. フォクスウェル「社会主義に於けるイギリス学派」森戸辰男訳(『社会思想全集』第二十一巻, 平凡社) 279頁。この6人の中で、ホールはリカードよりも先に、著書を公刊したのであるが(『ヨーロッパ諸国のの人々に関する文明の影響』*The Effects of Civilization on the People in European States*, 1805), フォクスウェルと同様に、ホールをリカード派社会主義者の中に含める堀経夫氏は、労働全収権の「主張の根底をなした労働価値説に基づいて立論した最も重要な学者はリカードであった」こと、また「これらの思想家の研究の主な対象は分配論であったが、古典派経済学者のなかで斯論に重点をおいた最初の人はいりカードであった」ことから、「リカード社会主義者という言葉は、リカードを中堅とする古典学派学説に立脚し、しかもそれと反対の結論を導き出した十九世紀前半のイギリス思想家の一群をさす、ということができ、従って、リカードよりも先に著書を公にしたホールをこの一群の中に加えることは、あながち不当ではないであろう」と述べている(『改訂・イギリス社会思想史概説』, 文雅堂銀行研究社, 1977年, 61頁)。
- 21) H.S. フォクスウェル『同上書』, 292頁。
- 22) E. LOWENTHAL, *The Ricardian Socialists*, p.5.
- 23) *Ibid.*, p.13.
- 24) F. エンゲルス「前掲書」, 26頁。
- 25) T. HODGSKIN, *The Natural and Artificial Right of property Contrasted*, p.25.
- 26) *Ibid.*, p.28.
- 27) J. ロック『市民政府論』鶴飼信成訳, 岩波文庫, 32頁。
- 28) 『同上書』, 32~33頁。
- 29) 『同上書』, 35頁。
- 30) 『同上書』, 37頁。
- 31) 『同上書』, 42~43頁。
- 32) 白井・野地氏は次のように指摘している。自然法は、「ダントレーブによれば、『名称を除いては、中世の自然法概念と近代のそれとの間に共通なものはほとんどない。』ほどであって、ホジスキンの場合にも、ロックとスミスの自然法を祖述しながらも、それをまさにリカード以後の段階を特色づけるような方法で資本攻撃の武器に用いている点を、特に重要視すべきである」。(白井厚・野地洋行「トマス・ホジスキンの『労働擁護論』その自然法思想と経済学について」、『三田学会雑誌』第51巻第9号, 1958年, 33頁)。
- 33) J. ロック『前掲書』, 46頁。
- 34) 『同上書』, 47頁。
- 35) ペティについては、K. マルクス『経済学批判』, 岩波文庫, 58~59頁参照。
- 36) たとえば、ベアは次のように指摘している。「ジョン・ロックは、特に価値をあたえる労働について語るばあい、資本家の労働と賃銀労働とを区別していない。しかし、全体的な観点からすると土地や仕事場の所有者の労働であった。何故かといえば、かれの立論は、労働が財産の唯一の合法的な権源であるという彼の提言を真理だと立証することにあつたからである」。(M. ベア『イギリス社会主義史』(二), 大島清訳, 岩波文庫, 55~56頁)。
- 37) 38) 39) 『同上書』(一), 188頁。
- 40) T. HODGSKIN, *Ibid.*, p.24.
- 41) 42) *Ibid.*, p.22.
- 43) 水田 洋・水田珠枝『社会主義思想史 1516~1848』社会思想社, 1970年, 94~98頁参照。
- 44) ホジスキンは次のように述べ、自然状態を「万人の万人に対する戦争状態」とするホップズの見解を批判している。「人々が互いに離れていて、見ず知らず、異なる言語を話し、異なる様式の衣類を身にまとい、買うことも売ることもしない時、彼らは互いを嫌い、軽蔑し、侮辱し、憎んだりするだろう。しかし、同じ社会の住民であれば、彼らは互いに提携し、その労働は相互のものであり、彼らは食糧と衣類を生産するために互いの手を使わなければならない。彼らの衣服と娯楽は似かよっているし、彼らの言語は同一である。彼らが互いに憎み、嫌い、恐れると仮定することは、現代社会の全機構に矛盾する」。(T. HODGSKIN, *Ibid.*, p.182.)
- 45) 「ホップズ以後アダム・スミスにいたるイギリスの社会思想の流れは、市民社会の成熟にともなって、国家権力によるその支えがしだいに後景に退いていくプロセスであった」(浜原正夫「近代的経済思想の形成」, 杉原四郎『古典学派の経済思想』, 有斐閣, 1977年, 11頁)。
- 46) 隅谷三喜男氏は次のように指摘している。「自然権の思想は近代ブルジョアジー解散の急進思想であり、ブルジョアジーの制覇に伴いベンサム功利主義によって克服された18世紀の遺物であったが、ホジスキンはこれを勤労階級の立場から勤労階級の自然権として新に解釈し直したのであり、嘗て封建制度を論難してブルジョアの自由を確立した自然法論を、ブルジョア社会をも亦一つの人為的的制度として排撃する理論をたらしめたのである」。(『リカード一派社会主義序説』, 舞出教授還暦記念論文集(Ⅰ), 『古典学派の生成と展開』, 有斐閣, 1952年, 261~262頁)。
- 47) T. HODGSKIN, *Ibid.*, p.64.
- 48) *Ibid.*, p.65. ホジスキンのこのような見解は、収獲逓減の法則に対する彼の批判と結びついている。
- 49) Cf. T. HODGSKIN, *Ibid.*, pp.69~72.
- 50) *Ibid.*, p.83.
- 51) *Ibid.*, p.84.
- 52) *Ibid.*, p.92. (A. スミス『諸国民の富』(二), 大内兵衛・松川七郎訳, 岩波文庫, 440頁参照)。
- 53) Cf. T. HODGSKIN, *Ibid.*, p.95.
- 54) *Ibid.*, p.95.
- 55) *Ibid.*, p.96.
- 56) *Ibid.*, p.98.
- 57) Cf. *Ibid.*, pp.98~100.
- 58) *Ibid.*, p.149.
- 59) *Ibid.*, p.156.
- 60) 「自然と人為とを対立することは、ホジスキンの思想におけるアルファでありオメガである」(デ・イ・ローゼンベルグ『経済学史』(二), 直井武夫・広島定吉訳, ナウカ社, 451頁)。
- 61) Cf. T. HODGSKIN, *Labour Defended against the Claims of Capital*, pp.85~86. 『労働擁護論』鈴木鴻一郎訳, 世界古典文庫, 68頁参照。
- 62) コールは次のように述べている。ホジスキンのウィリアム・トムソンは、「リカード経済学体系についての労働者階級の批判と転化を初めて明確に系統化した。その主要な著作において、この2人は大いに異なっていた。概して、トムソンはロバート・オーエン派の協同組合社会主義者だった。ホジスキンはウィリアム・ゴドウィンの伝統をひきつぐ哲学的無政府主義者だった。しかし、本質的には、リカードの前提からの推論は同じである。ホジスキンの『労働擁護論』で論じているように、もし労働がすべての価値の源泉であることを認めるならば、またリカードもそれを認める、明らかにすべての価値は労働者に属し、労働者はその労働の全生産物を受け取るべきだということである」。(Introduction by G.D.H. Cole, in *Labour Defended*)

- against the Claims of Capital, p.12.)
- 詳細には、鎌田武治「T. ホジスキンの W. トムソン イギリス初期社会主義思想における自然主義と功利主義」(横浜国立大学『エコノミア』第28号, 1966年)参照。
- 63) T. HODGSKIN, *The Natural and Artificial Right of Property Contrasted*, p.180.
- 64) *Ibid.*, pp.180~181.
- 65) W. スターク『経済学の思想的基礎』杉山忠平訳, 東洋経済新報社, 1960年, 137頁。
- 66) 67) E. HALÉVY, Thomas HODGSKIN, edited in English translation with an Introduction by A. J. Taylor, p.175.
- 68) Cf. T. HODGSKIN, Article to the *Economist*, March I, 1851: *Leview of Hale, Social Science and Orgainzation of Labour.*, E. Lowenthal, *Ibid.*, p.68.
- 69) ペアは「反資本主義の経済学」の中にホジスキンを含めているが(M. ペア『前掲書』(二)第八章), ホジスキンは私有財産制と自由競争を前掲とする「中間階級の社会」を理想としたのであって、ペアの分類には疑問がある。
- 70) T. HODGSKIN, *Popular Political Economy*, p.xxii.
- 71) T. HODGSKIN, Article to the *Economist*, 28 November 1846., cit. É. HALÉVY, *Ibid.*, p.136.
- 72) A. スミス『前掲書』(一), 151頁。
- 73) 『同上書』(一), 150頁。
- 74) マルクスは、ホジスキンの「自然価格」と「社会価格」について、「ホジスキンのこの理解においては、A. スミスの見解における正しい点と、混乱した点および混乱させる点とが、ともに、繰り返されている」(K. マルクス『剰余価値学説史』(1), 岡崎次郎・時永淑訳, 国民文庫, 142頁)と指摘している。
- 75) A. スミス『前掲書』(一), 151頁。
- 76) 『同上書』(一), 186頁参照。
- 77) たとえば、内田義彦氏は次のように述べている。スミスは、「社会の生産の三要因の所有者たる資本家、地主、賃労働者の三つの階級が相対立するものとしてあらわれ、この三階級がそれぞれ商人=商品所有者としてのみ対応しあうところの社会において、生産物は自然的にどう分配され、またどう再生産されるかが考えられている」。(『経済学の生誕』未来社, 1970年, 196頁)。
- 78) 「いかにもアダムは、商品の価値を、それにふくまれている労働時間によって規定してはいるが、そのあとでまたこの価格規定の現実性をアダム以前の時代にまでおしもどしてしまうのである。いいかえれば、彼にとって、単純商品の立場では真実だと思われたことが、単純商品にかわって、資本、賃労働、地代等々のもっと高度で複雑な諸形態が登場するやいなや、はっきりしなくなる」。(K. マルクス『経済学批判』岩波文庫, 67~68頁)。
- 79) A. スミス『前掲書』(一), 196頁。
- 80) K. マルクス『剰余価値学説史』(8), 国民文庫, 58~59頁。
- 81) D. リカード『前掲書』, 11~14頁。
- 82) 『同上書』, 11頁。
- 83) K. マルクス『前掲書』(7), 121~122頁参照。
- 84) ホジスキンはこの2人を批判の対象とすることを次のように述べている。「私が、これらの著者達を経済学者の代表者として選ぶ唯一の動機は、彼等が私の同意しかねる学説の比較にならぬほど最も有能にして雄弁なる支持者であるということである」(T. HODGSKIN, *Labour Defended against the Claims of Capital*, pp.32~33. 邦訳, 26~27頁)。
- また、ローエンソールは、『エコノミスト』の評論家としてのホジスキンを、よく取り扱う書物はリカードの『原理』、マカロックの『経済学原理』、J.S. ミルの『経済学原理』、スペンサーの『社会静学』であったと指摘している。(Cf. E. Lowenthal, *Ibid.*, pp.79~80.)
- 85) 「ミルは、リカードの理論を体系的な形で叙述した最初の
- 人であった。といっても、それはなかり抽象的な大要にすぎないが」。(K. マルクス『前掲書』(7), 147頁)。
- 86) 「貨物の交換価値は、労働の介在なくして、時間に依り影響を受ける。蓋し、資本の利潤がその中に含まれなければならない場合には、貨物の生産が他の貨物の生産以上に必要とする凡ゆる時間部分のために、それだけ追加がなされなければならないからである」。(J. ミル『経済学綱要』渡辺輝雄訳, 春秋社, 1948年, 87頁)。
- 87) K. マルクス『前掲書』(7), 147頁。
- 88) 『同上書』(7), 317~324頁参照。
- ホジスキンは、分業の効果をスミスはうまく説明しているが、マカロックによって付け加えられたものもあるとして、分業の効果に基づく生産力の上昇に関する叙述では、『大英百科辞典補遺』におけるマカロックの論文「経済学」を引用している(Cf. T. HODGSKIN, *Popular Political Economy*, pp.102~106.)。また、マカロックはリカードの述べる収穫逓減の法則を「一方では社会はたえず劣等な土地に頼るようになるほかはないが、他方では農業は無限の改良をうけられるものであり、この改良はそのかぎりでの土地の豊度の下降を相殺するものであって、相殺以上の力をもつこともありうるし、事実そうであることがきわめて頻繁にある」(J.R. マカロック「リカード一論」, 長洲一二訳, H.W. スピーゲル編『経済思想発展史』II, 東洋経済新報社, 1954年, 93頁)として、批判している。
- 89) リカード派社会主義者らが、労働がすべてのものを生産するとすれば、なぜ労働がすべてのものを受け取ってはならないのかということから労働全取権の主張へと向かったことは、スクローブ、リード、ロングフィールドらにリカードの労働価値説が危険な性格をもつものと確信させ、資本弁護論的性格をもった俗流経済学が現れる。「いまや問題は、もはやあの定理が正しいとか、この定理が正しいとかということにあるのではなく、それが資本にとって有利であるか、不利であるか」(K. マルクス『資本論』第二版の後書, 『資本論』(一), 岩波文庫, 23頁)というようなことになった。したがって、「リカード学派の解体」ということは、リカード派社会主義者を前提とするのであって、これらの問題を考える場合に、とくに次のような指摘が重要である。「何故にリカード以後、マカロック、セイ、シニオアなどにおいて、『労働』という概念は、牛や馬の労働というように転化されたり、企業家の労働、あるいは資本主義精神にまでも拡張・稀釈されたり、さらに雨や風や、太陽や土地のような自然が労働するとまでにゆがめられてきたのであろうか。また何故にサービス(用役、勤務、奉仕)という概念が、経済学の中で、この時代(19世紀の初めごろ)から大きな役割を演じるようになったのか。それはすべて社会における肉体的労働と精神的労働との分離・対立を前提とし、とりわけ1789~1848年の緊迫した空気が、リカード学派の解体を完成していったとみるのでなければならない」(戸田武雄『近代経済学批判』青木文庫, 1952年, 344頁)。
- 90) T. HODGSKIN, *Ibid.*, p.196.
- 91) A. アニーキンはその著書においてホジスキんにふれたあと次のように述べている。「社会主義者たちはリカードの労働価値説をそのままの形で受け入れた。彼らはそれを徹底的に論理的に追及し、そこから基本的な結論を生み出した。商品の価値は労働のみによってつくられる。したがって資本家の利潤と大地主の地代は、当然労働者のものであるこの価値の直接的な控除である」(『マルクス経済学序説 ペティからオーウェンまで』石島ユタカ訳, 駿台社, 1976年, 561頁)。
- また、R.L. ミークも述べているように、ホジスキンは「非労働者階級によってうけとられる純収入は本質的にはこの労働の『全生産物』からの控除である」という点で、同意見であった」(『労働価値論史研究』水田洋・宮本

- 義男訳、日本評論社、1957年、152頁)とはいえるにしても、ホジスキンは労働価値説を「論理的」ではなく、むしろ「倫理的」に追及したといえる。ホジスキンは現実の商品価格を論じる場合、利潤と地代は労働が生み出す価値からの「控除」として考えたのではなく、権力や欺瞞によって「自然価格」(価値)に付け加えられるものとして考えたのである。そのことから、譲渡利潤説的見解におちいつている。
- 92) 「資本にほとんどあらゆるものを与える理論を労働者が反駁し得るまでは、またそういう実践に反対する決意をもつまでは、労働者の状態は永続的には改善されえない」(T. HODGSKIN, Labour Defended against the Claims of Capital, p.19. 邦訳、15頁)。
- 93) Ibid., p.80~81. 邦訳、64頁。
- 94) 「自然法は、勤労は富によってむくわれ、怠惰は困窮によって罰せられるということである」(T. HODGSKIN, The Natural and Artificial Right of Property Contrasted, p.154.)。
- 95) T. HODGSKIN, Popular Political Economy, p.186. マルクスはこの箇所を『資本論』第1巻第17章で引用している(『資本論』(三)、岩波文庫、52頁)。
- 96) T. HODGSKIN, The Natural and Artificial Right of Property Contrasted, p.175.
- 97) 98) F. エンゲルス「『哲学の貧困』ドイツ語版・序文」(新潮社版『マルクス・エンゲルス選集』第3巻、9頁)。
- 99) T. HODGSKIN, Labour Defended against the Claims of Capital, p.55. 邦訳、44頁。
- 100) 「ここでやっと資本の性質が正しく把握される」(K. マルクス『剰余価値学説史』(8)、国民文庫、108頁)。
アニーキンはこのホジスキンの叙述を「ここでは、賃労働の搾取に帰する社会的関係として資本を理解している」(A. アニーキン『前掲書』、564頁)とするが、むしろ故・平尾敏氏が指摘しているように、「ホジスキンは、ここで、資本主義的生産においては、労働者自身から疎外された労働生産物が、生産手段のかたちにおいて、『労働に対する支配力を獲得する一手段』として、労働に対立して存在することを指摘している」(『リカード派社会主義の研究』、ミネルヴァ書房、1975年、11頁)とみる方が妥当である。マルクスの評価も『剰余価値学説史』の前後の文脈から考えて、そのようなものだといえる。
- 101) T. HODGSKIN, The Natural and Artificial Right of Property Contrasted, p.101.
- 102) K. マルクス『前掲書』(6)、279頁。
- 103) 安藤悦子「イギリスにおける労働者教育運動の成立 職工学校運動とその思想的背景」(『歴史学研究』青木書店、第272号、1963年)7頁。
- 104) 105) 106) M. ドップ「経済学者としてのマルクス」(『資本論』解説)国民文庫、1954年、199頁。

The Wage Labor of Ricardian Socialist Economics

By

Shunji TANAKA *

(Received December 1, 2014/Accepted December 5, 2014)

Summary : It is considered that, through criticism of Hodgskin's Capital Theory, the nature of "capital" can be learned anew and more deeply. As for Hodgskin, it has already been clarified that his theory of capital is nothing but a name invented for exploitation of wage labor. Indeed, his theory was still obsessed with the "fetish character of capital" and he did not necessarily get closer to Marx, however, we can see that Hodgskin took one step closer to Marx, than Ricardo did. In short, labor is everything. This was the last word of those called Ricardian Socialists representing wage laborers' interests from the standpoint of Ricardo, based on the premises of Ricardo himself. Also he revealed the essence of capital to a certain extent by insisting on the unfairness of profits and land rents Shuld be valued.

Key words : Fetish Character of Capital, Natural Law, Labor power Commodities, Wage Labor, Ricardian Socialism

* Professor Emeritus, Tokyo University of Agriculture